人文科学研究　No.14, pp.109-119　　March 2018

# 政治的事件としてのゾラのパンテオン葬

田　中　琢　三

## はじめに

パリの中心部に位置するパンテオンの地下には、フランス共和国に多大な貢献をしたとされる「偉人たち（grands hommes）」の遺体が祀られている。偉人の遺骸をパンテオンに移葬する儀式は、革命期に始まった国家的なイベントであり、フランス語で≪panthéonisation≫、日本語では一般に「パンテオン葬」と呼ばれている[1)]。パンテオンに葬られている70数名の偉人には科学者や作家も含まれるが、その多くは政治家と軍人であり、2002年にアレクサンドル・デュマ（Alexandre Dumas, 1802-1870）のパンテオン葬が行われるまで、パンテオンに祀られていた19世紀の文学者はヴィクトル・ユゴー（Victor Hugo, 1802-1885）とエミール・ゾラ（Émile Zola, 1840-1902）の２名だけであった。

ユゴーとゾラは、現在でもフランス国内外で高い人気を誇る大作家であり、両者とも晩年には共和主義者として社会的に大きな影響力を持っていた。したがってこの両者がパンテオンに眠っていることは今日では特に違和感は感じないが、1885年のユゴーのパンテオン葬と1908年のゾラのパンテオン葬は、全く異なる性格のものであり、ゾラはユゴーのように党派を超えて愛される国民的作家としてパンテオンに移葬されたわけではなかった。また、パンテオン葬を決定し、実行してきたのはその時々の政権であり、そこには多かれ少なかれ何らかの政治的意図が存在するが、とりわけゾラのパンテオン葬は極めて政治的な儀式として執り行われた。本稿では、わが国ではほとんど注目されてこなかったゾラのパンテオン葬が、どのような経緯で実施され、歴史的にどのような意味を有しているのかを当時の政治的状況との関係において明らかにしたい[2)]。

## Ⅰ．ユゴーのパンテオン葬との比較

以下では、1908年に挙行されたゾラのパンテオン葬の特徴を、その23年前に行われたユゴーのパンテオン葬と比較しながら検討したい[3)]。まず強調すべきは、ユゴーのパンテオン葬が、第三共和政の確立期に行われ、共和主義による国民の統合を象徴する祝祭的なイベントであったのに対して、ゾラのパンテオン葬は、20世紀初頭のフランス政治における政治的・イデオロギー的対立が直接的に反映された事件であったことである。ゾラのパンテオン葬は、歴史上、最も論争の的になったパンテオン葬であり、激しい反対運動を引き起こした。その背景にあるのは、ゾラが1898年１月13日の『ローロール *L'Aurore*』紙に発表した公開書簡「私は告発する！（J'accuse...!）」でユダヤ人の大尉アルフレッド・ドレフュス（Alfred Dreyfus, 1859-1935）の冤罪を訴えて国論を二分する事態に発展したドレフュス事件であり、この事件におけるドレフュス派と反ドレフュス派の対立が、そのままゾラのパンテオン葬の是非をめぐる対立となって再燃したのである。

ゾラとユゴーのパンテオン葬の性格の相違は、それらの具体的な段取りや規模の違いによく現れている。ユゴーの場合は、周辺に数千人が集まったパリ16区の自宅から出棺し、凱旋門に設置された祭壇に24時間安置され、一般市民のための大規模な通夜が営まれた。翌日の昼前に凱旋門から葬列が出発してパンテオンに向かったが、その時少なく見積もっても100万人以上の市民が沿道に詰めかけたとされ、葬儀というよりも祝祭に近いイベントであった。それに対してゾラの場合は、まずモンマルトルの墓地でゾラの棺が掘り出され、棺は霊柩車で直接パンテオンに移された。その際、出棺の時間も移送のルートも公表されていなかったため、パンテオン付近に到着するまでゾラの遺骸を乗せた霊柩車が一般市民に気づかれることはなかった。そして、パンテオンの内部で行われた通夜も一般には開放されず、参列したのは親族と親しい関係者だけであった。また、ユゴーのパンテオン葬では国や自治体の代表ら計19名が追悼演説を行ったのに対して、ゾラのパンテオン葬で追悼演説を行ったのは１名だけであった。

共和国の祭典として華々しく行われたユゴーのパンテオン葬とは対照的に、ゾラのパンテオン葬が人目を避けるように実施されたのは、政府当局が反対派の動きを警戒していたからにほかならない。実際、儀式の当日には、厳戒態勢が敷かれるなか反対派は激しいデモを起こし、セレモニーに列席していたドレフュスがパンテオン内で銃撃されるというテロ事件まで起きた。この事件については後述するが、いずれにせよ、このように賛否両論が渦巻くなかで行われたゾラのパンテオン葬は、治安上の問題から控えめなセレモニーにせざるを得なかったのである。

ユゴーのパンテオン葬が行われた際にも少なからず反対派は存在しており、例えばカトリック勢力は、第二帝政期に教会に戻っていたパンテオンを再び非宗教化して共和国の儀式に利用することに激しく反発していたが、それはパンテオン葬自体への批判であり、国民的作家として広く認知されていたユゴー本人への批判はほとんどなかった。それに対して、ゾラのパンテオン葬への批判は、儀式そのものへの批判ではなく、もっぱらゾラ自身の政治的立場、つまりドレフュス派の闘士としてのゾラに対する攻撃にほかならなかった。実際、ドレフュス事件とゾラのパンテオン葬は密接に結びついており、このパンテオン葬はドレフュス事件の続編といっても過言ではないのである。

## Ⅱ．ドレフュス派と反ドレフュス派の対立

ドレフュス事件は、1899年９月に大統領の特赦によってドレフュスが出獄し、さらに1900年12月に成立した「大赦法（loi d'amnistie）」によって事件に関する訴訟がすべて無効となり一応の決着を迎えた[4)]。ドレフュス派は実質的な勝利を収めたが、軍法会議で下されたドレフュスの有罪判決は取り消されず、ゾラをはじめとする多くの関係者はこの妥協的な解決に批判的であった。ドレフュスの復権がなされないまま1902年９月にゾラは急死するが、同年の12月に、ジャン・ジョレス（Jean Jaurès, 1859-1914）ら７名のドレフュス派の国会議員によってゾラの遺骸をパンテオンに移葬する法案が初めて国会に提出された。この法案は否決され廃案となるが、指摘すべきは、ゾラのパンテオン葬を推進したのはドレフュス派の政治家たちであることであり、その目的は、何よりもドレフュス派を代表する知識人であるゾラを公式に追悼し、顕彰することでドレフュスおよびドレフュス派の名誉を回復することにあった。

ドレフュスの有罪判決が破棄されたのは、ゾラの死から４年後の1906年のことである。1903年４月の国会でのジョレスの質問を契機として、日本の最高裁にあたる破棄院で再びドレフュスに関する審議が行われ、1906年７月12日にドレフュスの有罪が取り消されたのである。無罪が確定したドレフュスは、すべての市民権を回復し、翌日の国会でフランスの陸軍に復帰することが承認された。ゾラのパンテオン葬に

関する法案が再び国会に提出されたのは、まさにドレフュスが復権した日、つまり1906年７月13日のことである。下院議員のジュール＝ルイ・ブルトン（Jules-Louis Breton, 1872-1940）によって提出されたこの法案は、ジョレスら30名のドレフュス派の議員の連名になっていた。彼らはドレフュスの復権によって事件が再びクローズアップされたこの機会を利用して、ゾラのパンテオン葬の法案を可決し、ドレフュス派の勝利を確固たるものにしようとしたのである。当時つまり第三共和政の国会は「上院（Sénat）」と「下院（Chambre des députés）」からなり、法案はまず下院で審議、採決され、下院で可決されると上院に送られて審議、採決されるというプロセスをたどった。ゾラのパンテオン葬の法案は、提出されたその日に下院において賛成多数で可決され、その約５か月後の1906年12月11日に上院でも可決されて法案は成立した。このようにドレフュスの無罪が確定して彼の名誉が回復される事態になったからこそ、一度は消えかけたゾラのパンテオン葬が実現される運びとなったといえる。

しかし実際にパンテオン葬が執り行われたのは法案成立から１年半も経過した1908年６月４日であった。当初は1907年のゾラの誕生日である４月２日に予定されていたが、延期を繰返してその日になったのである。延期の理由として、議会や選挙の日程との関係や、政府が労働運動への対応に追われていたこと、パンテオンの地下墓地の修復に時間を要したことなどが挙げられるが、反ドレフュス派陣営が激しい反対運動を展開していたことも大きな妨げになっていた。

ゾラのパンテオン葬への批判が高まった背景には、1905年12月に成立した「政教分離法（loi de séparation des Églises et de l'État）」の影響がある。政教分離は1880年代から共和国政府が積極的に進めてきた政策であるが、ドレフュス事件の影響で急進共和派が議席を増やした結果、法制化されるに至ったのである。そして、この法律のもとで1906年に国による教会の財産調査が実施されるが、それに教会側は激しく抵抗し、政府との対立を強めていた。こうした状況において、徹底した反教権主義者であったゾラをパンテオンに移葬することは、カトリック勢力の猛烈な反発を招かざるを得なかったのである。また、ドレフュス事件で軍部を糾弾したゾラに対する軍人や軍関係者の拒否反応も大きいものがあった。例えば、1810年にパンテオンに葬られたジャン・ランヌ元帥（Jean Lannes, 1769-1809）の孫が、ゾラの遺骸がパンテオンに入るのなら、ランヌ元帥の遺骸をパンテオンから出したいという希望を当時の首相ジョルジュ・クレマンソー（Georges Clemenceau, 1841-1929）に伝えている。結局、この意向は実現されなかったが、いずれにせよ、反対派にとって重要なことは、ゾラのパンテオン葬の実施により反教会と反軍部を体現するドレフュス派の勝利が公認されるという事態を阻止することであった。

こうした反対運動の中心となったのはシャルル・モーラス（Charles Maurras, 1868-1952）が主導する極右団体「アクシオン・フランセーズ（Action française）」である[5)]。この組織は1899年に創刊された反ドレフュス派による雑誌『アクシオン・フランセーズ』を出発点とするが、活動が本格化するのは1905年にモーラスが同名の政治団体を設立してからである。前述した1906年の教会の財産調査に抵抗するカトリック勢力を擁護して支持を増やし、1908年には機関紙を日刊化してプロパガンダを強化している。ほかの反ドレフュス派の団体、例えば「フランス祖国同盟（Ligue de la patrie française）」や「愛国者同盟（Ligue des patriotes）」などもゾラのパンテオン葬に対する反対運動を展開したが、アクシオン・フランセーズはその組織力と過激さで際立っていた。

アクシオン・フランセーズのメンバーは、パンテオン葬の法案が下院で可決された直後に、ゾラはフランスを侮辱したよそ者のヴェネチア人であり、ゾラのパンテオン葬を推進したのは外国人とユダヤ人だ、という内容のビラをパリ中にばら撒いている。ヴェネチア生まれの父を持つゾラは、生前から反ドレフュス派によってよそ者の外国人として攻撃されていたが、指摘すべきは、ドレフュス事件の時に新聞や雑誌

に溢れていたこのような排外主義的、反ユダヤ主義的言説が、ゾラのパンテオン葬をめぐって再び喧伝されるようになることである。そして、アクシオン・フランセーズのねらいは、この機会に改めてゾラを糾弾することによってドレフュス事件を再燃させ、それをカンフル剤に団体の運動をさらに盛り上げることにあった。

思想的に議会制民主主義を否定する立場であったアクシオン・フランセーズは、国会以外の場での反対運動、つまり街頭でのデモや喧伝活動に専念していたが、反ドレフュス派の国会議員、つまり王党派や共和派右派を中心とする政治家は、国会で論陣を張ってゾラのパンテオン葬に反対した。そして、彼らがドレフュス派の国会議員、つまり急進共和派や社会主義者を中心とする政治家と戦わせた議論において、ドレフュス事件自体は問題にされることはなかったものの、この事件が生み出した両派の根深い対立が再び顕在化することになるのである。

## Ⅲ. 国会における論戦

国会ではゾラがパンテオン葬に値する人物か否かをめぐって審議が行われたが、その過程で焦点となったのは、ゾラの二つの側面、つまり「私は告発する！」を書いたドレフュス派の知識人としてのゾラと、『ルーゴン・マッカール叢書 *Les Rougon-Macquart : Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le Second Empire*』（1870-1893）を書いた自然主義文学の作家としてのゾラを、それぞれどのように評価するのか、あるいはどちらの側面を重視するのかという問題であった。

ゾラのパンテオン葬に賛成するドレフュス派の国会議員は、ドレフュス事件において無実の人間を救うために立ち上がり、正義と真実の実現を目指して戦ったゾラの英雄的行為をパンテオン入りの第一の理由として挙げることになる。つまり、ドレフュス派の知識人としてのゾラの活躍を強調することによってゾラのパンテオン葬を正当化しようとしたのである。これに対して、反ドレフュス派の国会議員は、おもに作家としてのゾラを攻撃することに重点を置いて反対論を展開した。当時の文壇ではゾラの小説に対する美学的・道徳的観点からの批判が根強くあり、その文学的評価が定まっていなかったため、反対派にとってはゾラの作品を攻撃することがこの文学者の価値を貶めるためには効果的であったのである。

こうした反対派の議員の主張は、1906年12月11日に行われた上院におけるエマニュエル・ド・ラス・カーズ（Emmanuel de Las Cases, 1854-1934）の演説に集約されている[6)]。ラス・カーズはまずゾラの「私は告発する！」に言及し、この公開書簡の発表を、それまで裁判上の問題であったドレフュス事件を政治的問題に発展させることで国内を混乱に陥れることになったとして断罪した後、ゾラの小説を激しく非難する。ラス・カーズによると『ルーゴン・マッカール叢書』はポルノグラフィーであり、悪徳におもねている。ゾラはフランス社会の腐敗を描くが、それに対する解決策は示さない。ゾラはフランスのさまざまな社会階層に属する人々を偏見に基づいて描き、彼らを侮辱している。このようなラス・カーズによる批判は従来から行われていた自然主義文学に対する批判と同じであり、目新しいものではないが、その後、反対派の国会議員たちは、パンテオン葬をめぐる議論において、こうした紋切り型の批判を繰り返すことになる。また、ラス・カーズの演説で注目すべきは、ゾラのパンテオン葬はドレフュス派による報復であり、それを認めるとドレフュス事件が再燃し、国内に再び混乱が生じるであろうと述べていることである。そして、事態はまさにこの予想通りになり、パンテオン葬の決定後、ドレフュス派に反撃するためにアクシオン・フランセーズが過激な運動を展開することになった。

国会における論戦のクライマックスは、ジャン・ジョレスとモーリス・バレス（Maurice Barrès,

1862-1923）が激論を交わした1908年３月19日の下院における審議である[7)]。この日はゾラのパンテオン葬の特別予算案に関する審議であり、すでに成立していたパンテオン葬の法案を覆すことは不可能であったが、バレスはこの機会を利用してゾラを徹底的に攻撃することによって、自らの存在をアピールするとともに、反対派の団結を図ろうとした。議会の外ではアクシオン・フランセーズを率いるモーラスが反対派の中心であったが、議会における反対派のリーダーはバレスであった。

この日行った演説において、バレスはドレフュス事件そのものは問題にしないと明言したうえで、前述したような紋切り型の批判によってゾラの小説を糾弾し、この作家は下劣で卑猥なことにしか関心がなく、それを科学や共和主義の鎧で覆い隠しているだけだと告発する。そして、もしパンテオン葬が実施されるならばゾラの作品が喚起するフランス社会の悪いイメージを公に認めることになり、対外的にフランスの評判を貶めることになると主張した。さらにバレスは、ゾラが「私は告発する！」を発表した動機は、小説家としての成功に飽き足らず、新たな活躍の場を求めた売名行為であると断言する。そして演説の最後に、ゾラの『壊滅 *La Débâcle*』（1892）を取り上げ、この小説のドイツ語版の表紙にドイツ兵がフランス兵を銃剣で突き刺す絵が印刷されていることを問題にして、式典でゾラの遺骸が入った棺の前をフランス軍が行進するのは軍部に対する侮辱であると訴えた。『壊滅』は普仏戦争におけるフランス軍の敗北を描いた作品で、出版当初から軍部を中傷しているという批判が保守派からなされていた。

指摘すべきは、この演説でバレスがゾラを糾弾する一方で、ユゴーをフランスの理想を体現した真の国民的詩人として称賛していることである。当時は1885年の華々しいユゴーのパンテオン葬が人々の記憶に残っており、比較の対象としてユゴーを取り上げるのは極めて自然であるが、バレスにとってユゴーのパンテオン葬は特別な意味を持つ出来事でもあった。彼の小説『根こそぎにされた人々 *Les Déracinés*』（1897）に、主人公がユゴーの葬儀に集まった群衆を目の当たりにして、国民を統合するものとしての祖国を再認識するという有名な場面[8)]があるように、バレスのナショナリズムの形成においてユゴーのパンテオン葬は重要な役割を果たしていると考えられる。

このようなバレスの演説の後に、それに反論すべくジョレスが発言を行った。ジョレスは、作家ゾラと知識人ゾラを区別して考えることは不可能であるとしたうえで、ゾラの作品と生涯は真実の追究という共通の目的があり、彼が小説で人間や社会の醜悪な側面を描出するのも、ドレフュス事件に関わったのも、真実を追い求めるためであったとする。また、ジョレスによると、ゾラは生（vie）や科学の力によって人間は再生し、運命を支配できるという楽観的なヴィジョンを持ち、そうした思想はディドロ（Denis Diderot, 1713-1784）に代表される18世紀の啓蒙主義者の精神を継承しているという。

さらに、ジョレスはバレスがユゴーを賛美することに疑問を投げかける。なぜなら、彼によれば、ユゴーのロマン主義は自由・平等・友愛というフランス革命の精神に由来しており、バレスの反動的なナショナリズムとは相反するものだからである。ジョレスによると、ロマン主義と同様にゾラの自然主義も18世紀の啓蒙主義を介してフランス革命の精神を受け継いでおり、この大革命の精神が、バレスのいう伝統、つまり革命以前の伝統とは別のもう一つのフランスの伝統を形成しているのである。ジョレスのいうこの二つの伝統の対立が、ドレフュス派と反ドレフュス派の対立にほかならないといえるが、いずれにせよ、重要なことは、ジョレスによってゾラのパンテオン葬が明確にフランス革命の延長線上に位置づけられたことであった。

## Ⅳ. セレモニーとテロ事件

1908年６月４日、ゾラのパンテオン葬は反対派のデモで騒然とするなかで執り行われた。セレモニーの前日に、モンマルトル墓地でゾラの遺骸が掘り出され、霊柩車でパンテオンに移されたが、この葬列はパンテオンの近くで反対派の怒号と罵声を浴びることになる。その際、ゾラの未亡人アレクサンドリーヌらが乗った自動車が襲撃され、車を飾っていた花輪が引きちぎられた。前述したようにその夜にパンテオン内で非公開の通夜が行われたが、外では真夜中までデモ隊と治安当局の衝突が続いていた。翌日のパンテオン葬当日もパンテオン周辺では早朝から厳戒態勢が敷かれたが、反対派のデモは激しさを増し、結局250人近くが逮捕される事態となった。

パンテオンで式典が開始されたのは、大統領のアルマン・ファリエール（Armand Fallières, 1841-1931）と首相のジョルジュ・クレマンソーが到着した午前９時半ごろである。式典は、まず初めにフランス国立高等音楽院のオーケストラと合唱団による演奏、次に公教育・美術大臣のガストン・ドゥメルグ（Gaston Doumergue, 1863-1937）による追悼演説、最後に再びオーケストラと合唱団による演奏という構成であった。オープニングで演奏されたのはフランスの国歌「ラ・マルセイエーズ（La Marseillaise）」と、アルフレッド・ブリュノー（Alfred Bruneau, 1857-1934）が作曲したゾラのオペラ『メシドール *Messidor*』（1897年初演）の前奏曲、そしてベートーヴェンの交響曲第３番『英雄』の「葬送行進曲」、フィナーレで演奏されたのはベートーヴェンの交響曲第９番と「門出の歌（Chant du Départ）」であった。

もともと革命歌であった「ラ・マルセイエーズ」と「門出の歌」がオープニングとフィナーレに演奏されたのは大革命とパンテオン葬の結びつきを知らしめるものであったといえる[9)]。式典において演奏が占める割合が多いのは、追悼演説の少なさを補うためだと思われるが、特にドレフュス派の闘士としてゾラと苦楽をともにしてきた首相のクレマンソーが追悼演説を行わなかったのは示唆的であり、ゾラのパンテオン葬に対する政府の消極的な姿勢がよく表れているといえるだろう。

式典で行われた唯一の追悼演説であるガストン・ドゥメルグの弔辞は、何よりもドレフュス事件で真実のために戦った知識人ゾラを称賛する内容であり、「私は告発する！」がゾラのパンテオン入りの理由であることを言明するものであった。また、ドゥメルグは反ドレフュス派のナショナリストたちを批判し、ゾラは彼らが言うような「よそ者」ではなく、フランスの威厳や名誉を常に考える愛国者であったことを強調するなど、この追悼演説はドレフュス派の勝利宣言そのものであった。

しかし、ゾラのパンテオン葬が終わった後も、ドレフュス派と反ドレフュス派の対立は収まるどころか、本格的に再燃することになる。それは、前述したようにセレモニーの当日にパンテオン内でアルフレッド・ドレフュスが銃撃されるという事件があり、その犯人の裁判の過程でドレフュス事件をめぐる議論が再び激しくなったからである。

このテロ事件は、予定されていたセレモニーがすべて終了し、出席していた政府の要人たちがパンテオンから外に出た直後に起きた。まだパンテオン内にいたドレフュスに二発の銃弾が放たれ、最初の一発は右肩をかすめ、二発目は心臓をかばおうとしたドレフュスの右腕に命中し、銃撃犯はその場で取り押さえられた。犯人のルイ・グレゴリー（Louis Grégori, 1942-1910）は、式典の最中に日刊紙『ル・ゴーロワ *Le Gaulois*』の記者を名乗ってパンテオンに入っていた。記者という身分は虚偽ではなく、実際にグレゴリーは当時の有力紙であった『ル・ゴーロワ』の軍事欄を担当するジャーナリストであり、ゾラのパンテオン葬の正式な招待状を携えた人物であった[10)]。

1842年生まれのグレゴリーは、1840年生まれのゾラと同年代であり、事件当時すでに66才であった。高等師範学校（École normale supérieure）を卒業した秀才で、軍事の専門家としてジャーナリズムの世界に入り、1879年に『ル・ゴーロワ』紙の記者となった。学歴的にエリート中のエリートであるグレゴリーは、ジャーナリストとして名が知られた存在だったが、特定の政治団体には参加せず、ドレフュス事件に関して積極的に発言した形跡も見られない。しかし、反ユダヤ主義者のエデュアール・ドリュモン（Édouard Drumont, 1844-1917）の友人であることや『ル・ゴーロワ』紙が政治的に保守色の強い新聞であることから、グレゴリーが従来から反ドレフェス派であったであろうことは間違いない。

グレゴリーは予審判事の取調べに対して、ゾラのパンテオン葬は軍部に対する侮辱であり、その侮辱を晴らすため犯行に及んだと供述している。他方で、彼はセレモニーに軍部を裏切ったドレフュスが列席していることに激昂し、持参したピストルで撃ったとも述べており、犯行が計画的であったかどうかは不明である。重要なことは、グレゴリーが殺意を否定したうえで、この犯行は一つの意思表示であると主張し、「私はドレフュスではなく、ドレフュス主義（dreyfusisme）を銃撃した」と供述していることである。この発言は右派の新聞によって繰り返し喧伝され、一躍グレゴリーは反ドレフュス派陣営の英雄的存在になった。

1906年７月のドレフュスの無罪判決とそれに続くゾラのパンテオン葬は、ドレフュス派の政治的勝利を意味するものであり、このままドレフュス事件が終結すると反ドレフュス派の敗北が確定する状況にあった。したがって「ドレフュス主義を銃撃した」とされるグレゴリーの事件は、ドレフュス事件を再燃させ、ドレフュスの裁判をやり直し、彼を再び有罪にすることを最終目標とする反ドレフュス派にとって絶好の機会であった。反ドレフュス派は、かつてドレフュス派が軍法会議で有罪となったドレフュスの再審を求めていたように、その再審で無罪となったドレフュスの再審、つまり「再審の再審（révision de la révision）」を要求していたのである。彼らはグレゴリーの裁判をその第一歩として位置づけており、とりわけアクシオン・フランセーズが「再審の再審」のキャンペーンを展開することになった。

## Ⅴ．グレゴリー裁判

グレゴリーの公判は1908年９月10日・11日にセーヌの重罪裁判所で開かれた。この裁判所は奇しくも10年前に軍部から名誉棄損で訴えられたゾラの裁判が行われた場所でもあった。指摘すべきは、このゾラ裁判とグレゴリー裁判は、それぞれの弁護側の戦術が奇妙に似通っていることである。1898年の裁判においてゾラの弁護側は、軍部に対する名誉棄損を問題にするのではなく、闇に葬られようとしていたドレフュス事件を問題にした。同じように、その10年後の裁判においても、グレゴリーの弁護側は、銃撃事件を問題にするのではなく、忘れられようとしていたドレフュス事件を問題にしたのである。

そのためグレゴリーの弁護を担当したジョゼフ・メナール（Joseph Ménard, 1859-1911）は証人としてドレフュス事件当時に軍部に在籍していた関係者を出廷させた。そして被告のグレゴリー自身も、1906年の破棄院によるドレフュスの無罪判決を非難するだけではなく、ゾラの小説やパンテオン葬も批判した。被告側のねらいは、ドレフュスが有罪であり、ゾラが悪者であることを強調して、陪審員たちにこのテロ事件はグレゴリーが義憤にかられて行った正当な行為であると思わせることにあった。口頭弁論においてメナールは陪審団に、祖国と軍隊のためにテロを行ったグレゴリーはその動機において評価すべきであり、グレゴリーに無罪が宣告されない限りドレフュス派と反ドレフュス派の争いは終わらない、なぜならグレゴリーが有罪になると別の人間がテロ行為に加担することになるからだと訴えた。

こうした弁護側の戦略が功を奏したのか、最終的に陪審団はグレゴリーに無罪判決を下した。客観的に見てグレゴリーの行為は明らかな殺人未遂であり、ピストルを持ってパンテオンに入ったという事実が示すように計画的な犯行の疑いもある。それにもかかわらず無罪になったのは、今日から見れば非常に不可解な判決であるが、そこには陪審制の制度的な問題が関係しているように思われる。当時の重罪裁判所では一般市民から選ばれた12名の陪審員による陪審制が採用されていた。グレゴリー裁判の陪審員たちの年齢や職業などの詳細は不明だが、陪審員は比較的裕福な階級の人々から構成され、そのうち何人かは裁判前から無罪にすると公言していたようであり、反ドレフュス派の保守的な人々が陪審員の多数を占めていたであろうことが推察できる。いずれにせよ、20世紀初頭の一般市民の間に広まっていた軍国主義的、愛国主義的な感情や反ユダヤ感情が、この判決に反映されていることは間違いないであろう。

ゾラ研究の第一人者であるアラン・パジェスが、グレゴリー裁判をもってドレフュス事件は幕を閉じると指摘しているように、事件に直接関係する出来事が世間の注目を集めるのはこの裁判が最後であった[11)]。そして、ドレフュス事件最後のドラマとなったグレゴリー裁判が、無罪判決で反ドレフュス派の勝利に終わったという事実は重大な意味合いを持つものだといえる。

第一に、それはゾラのパンテオン葬によって具現化されたドレフュス派の勝利が、実は当時の議会における政治的な勝利が反映されたものにすぎなかったことを示唆している。国会でゾラのパンテオン葬の法案が成立したのは、1906年５月の下院選挙で共和派左派が過半数を獲得し、同年10月にはドレフュス事件でゾラの盟友であったクレマンソーが首相の座についたからであった。つまり国会においてドレフュス派の議員が多数を占め、クレマンソーという筋金入りのドレフュス派の権力者がいたからこそパンテオン葬が実現したのであるが、他方で、一般国民の間には「反ドレフュス主義」と呼ぶべき感情がまだ根強く存在していたのである。そして、この時期に議会制民主主義を否定するアクシオン・フランセーズが勢力を拡大した要因の一つは、こうした議会に反映されない国民感情の受け皿になったことにあるといえるだろう。

第二に、グレゴリーの無罪判決は、これ以降もドレフュス派と反ドレフュス派の争いが継続していくことを意味していた。つまり、このことによってドレフュス派の勝利によるドレフュス事件の決着が棚上げにされ、反ドレフュス派による巻き返しの可能性が開かれたのである。反ドレフュス派にとって、この判決は裁判所が認めた正真正銘の勝利であり、ドレフュスの復権とそれに続くゾラのパンテオン葬に対する復讐にほかならなかった。その結果、反ドレフュス派の団体、特にアクシオン・フランセーズはさらに勢いを増し、ドレフュスの「再審の再審」を要求する運動を活発化させることになった。

指摘すべきは、20世紀初頭のアクシオン・フランセーズの急成長とゾラのパンテオン葬が密接に関係していることである。つまり、このパンテオン葬に対する抗議活動を行ったことにより、それがひとつの起爆剤となって、アクシオン・フランセーズの活動が過激化し、組織化されていったという側面がある。そして、従来の政治団体には見られなかったアクシオン・フランセーズの過激な活動、特にゾラのパンテオン葬と同時期に結成された暴力組織「カムロ・デュ・ロワ（Camelots du roi）」の活動によって、反ドレフュス派陣営は第二次世界大戦まで勢力を保ち続ける。例えば、国会でゾラのパンテオン葬の実施を熱烈に訴えたジョレスは1914年に「カムロ・デュ・ロワ」によって暗殺され、1925年にはフランスで最初のファシスト団体「フェソー（Faisceau）」がアクシオン・フランセーズ出身のジョルジュ・ヴァロワ（Georges Valois, 1878-1945）によって結成される。そして1940年代前半のヴィシー政府では、ナチス・ドイツの傀儡政権とはいえ、かつての反ドレフュス派の人々が権力の座につくことになった[12)]。

このように反ドレフュス派陣営は、ゾラのパンテオン葬を一つの契機としてアクシオン・フランセーズの台頭とともに新たな様相を見せるが、ドレフュス派陣営も、このパンテオン葬と前後して新しい局面を

迎えることになる。1902年５月の総選挙でドレフュス派は勝利を収め、急進共和派と社会主義者が与党として政権を握り、一致団結してゾラのパンテオン葬を推進した。しかし、パンテオン葬の法案が成立した1906年に、当時盛んになっていた労働運動への対応をめぐって、急進共和派のクレマンソーと社会主義者のジョレスが対立し、左派の政権に亀裂が生じていく。また、注目すべきは、1908年のゾラのパンテオン葬と同時期に、熱心なドレフュス派として活動したシャルル・ペギー（Charles Péguy, 1873-1914）が転向したことである。つまり、ドレフュス派が議会の多数派になったからこそゾラのパンテオン葬が実現したのであるが、権力を握ることによって保守化、政治化していくドレフュス派知識人に対する失望から、ペギーはカトリシズムに接近していくのである[13)]。

## おわりに

歴史家のミシェル・ヴィノックによると、ドレフュス事件が生み出した対立とは、ゾラに代表される個人主義、理性、普遍主義を擁護する「知識人（intellectuels）」とバレスに代表される全体主義、本能、排外主義を擁護する「ナショナリスト（nationalistes）」の対立であり、その後、例えば1950年代のアルジェリア戦争の時に植民地主義に反対する「知識人」とフランス領アルジェリアを守ろうとする「ナショナリスト」が対峙したように、この対立の構図は装いを変えながらフランスの歴史において繰り返し表れることになるという[14)]。

このような「知識人」と「ナショナリスト」の対立という観点から見ると、ゾラのパンテオン葬は、そのセレモニー自体よりも、パンテオン葬をめぐる賛否両論の議論や、ゾラの死からグレゴリー裁判までのプロセスそのものに重要性があるといえるだろう。なぜなら、これらの議論やプロセスを通じて、新たな段階に入った「知識人」と「ナショナリスト」の闘争が、ヴィシー政府に至るまで20世紀前半のフランス政治の動向に大きな影響を与えることになるからである。

つまり、ゾラのパンテオン葬が実施されたことで「知識人」の勝利が具現化される一方で、それに対する反対運動およびグレゴリー裁判を契機として「ナショナリスト」、特にアクシオン・フランセーズが存在感を増し、フランスにおけるファシズムへの道を開くことになった。このように、ゾラのパンテオン葬は、ドレフュス事件の影響下において当時の政局を反映した極めて時局的な出来事であるが、それにとどまらず、20世紀前半のフランス政治の流れにおいて重要な位置を占める歴史的な事件であったのである。

### 注

1）パンテオンおよびパンテオン葬の歴史については以下を参照のこと。Jean-François Decraene, *Le Petit Dictionnaire des grands hommes du Panthéon*, Éditions du patrimoine, Centre des monuments nationaux, 2005；*Le Panthéon : Temple de la nation*, Édition du patrimoine, Centre des monuments nationaux, 2000；Mona Ozouf, « Le Panthéon : l'École normale des morts », in *Les Lieux de mémoire*, t. I, *La République*, sous la direction de Pierre Nora, Gallimard, 1984, pp. 139-166［邦訳：モナ・オズーフ「パンテオン：死者たちのエコール・ノルマル」長井伸仁訳、ピエール・ノラ編『記憶の場：フランス国民意識の文化史 第２巻「統合」』谷川稔監訳、岩波書店、2003年、105-137頁］；長井伸仁『歴史がつくった偉人たち：近代フランスとパンテオン』、山川出版社、2007年。

2）ゾラのパンテオン葬については以下を参照のこと。Mark Knobel, « Le Transfert des cendres d'Émile Zola au Panthéon », *Les Cahiers naturalistes*, n° 62, 1988, pp. 27-34 ; Jean-François Condette, « La

translation des cendres d'Émile Zola au Panthéon. La difficile et posthume revanche de l'intellectuel dreyfusard, juillet 1906-juin 1908 », *Revue Historique*, n° 615, juillet-septembre 2000, pp. 655-684 ; Michel Drouin, *Zola au Panthéon : La quatrième affaire Dreyfus*, Perrin, 2008 ; Alain Pagès(éd.), *Zola au Panthéon : L'épilogue de l'affaire Dreyfus*, Presses Sorbonne nouvelle, 2010.

3）ユゴーのパンテオン葬については以下を参照のこと。Anver Ben-Amos, « Les funérailles de Victor Hugo : Apothéose de l'événement spectacle », in *Les Lieux de mémoire*, t.1, *La République*, sous la direction de Pierre Nora, Gallimard, 1984, pp. 473-522 ; *Tombeau de Victor Hugo : le 22 mai 1885 : la fin du siècle*, Quinette, 1985 ; 小倉孝誠『挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる19世紀フランス：愛・恐怖・群集』、人文書院、1997年、157-187頁（「V. ヴィクトル・ユゴーの死」）。

4）ドレフュス事件に関する研究書は数多くあるが、ここではおもに以下を参照した。Alain Pagès, *Émile Zola : De J'accuse au Panthéon*, Lucien Souny, Saint-Paul, 2008 ; 渡辺一民『ドレーフュス事件：政治体験から文学創造への道程』、筑摩書房、1972年。

5）アクシオン・フランセーズについは以下を参照のこと。Jacques Prévotat, *L'Action française*, Presses universitaires de France, coll. « Que sais-je ? », 2004.［邦訳：ジャック・プレヴォタ『アクシオン・フランセーズ：フランスの右翼同盟の足跡』斎藤かぐみ訳、白水社、文庫クセジュ、2009年］

6）ラス・カーズの演説については以下を参照のこと。Michel Drouin, *op.cit.*, pp. 26-30.

7）この日の下院での議論は以下に収録されている。*1908. Zola au Panthéon. le débat parlementaire sur le transfert des cendres de Zola au Panthéon*, Éditions du patrimoine, Centre des monuments nationaux, 2008.　バレスとジョレスの論戦については以下を参照のこと。Antoine Compagnon, « Les ennemis de Zola », in Alain Pagès(éd.), *op.cit.*, pp.17-31.　またバレスがこの論戦の前後に『レコー・ド・パリ *L'Écho de Paris*』紙に掲載したゾラのパンテオン葬に関する二本の記事（1908年３月10日の記事「物書きとしてのエミール・ゾラ« Émile Zola comme littérateur »」と同年３月28日の記事「論争から一夜明けて « Le lendemain de Bataille »）」が以下に収録されている。Maurice Barrès, « Contre le transfert de Zola au Panthéon », in *L'Œuvre de Maurice Barrès*, t. IV, Club de l'Honnête Homme, 1965, pp. 606-609.

8）Maurice Barrès, *Les Déracinés*, dans *Romans et voyages*, Robert Laffont, coll. « Bouquins », t. I, 1994, pp. 726-730 et pp. 735-737.

9）ゾラのパンテオン葬で演奏された音楽については以下を参照のこと。Jean-Sébastien Macke, « «Gloire à Zola»... Une panthéonisation en musique et en chansons », in Alain Pagès(éd.), *op.cit.*, pp. 41-53.

10）グレゴリーおよびグレゴリー裁判については以下を参照のこと。Michel Drouin, « Qui était Grégori ? » in *Ibid.*, pp. 55-64. グレゴリー裁判の公的な記録は現存していないが、グレゴリー自身によって印刷され、『ラ・リーブル・パロール *La Libre Parole*』紙によって販売された以下の小冊子に、裁判におけるグレゴリーやメナールの発言が収録されている。*Le procès du Panthéon. 4 juin–10 et 11 septembre 1908. Grégori, Dreyfus et Zola devant le jury. La Révision de la Révision. Préface et portrait de Grégori. Compte rendu sténographique et révisé des débats*, Aux bureaux de la « Libre Parole », 1908.

11）Voir Alain Pagès, *op.cit.*, p. 339.

12）ヴィシー政権の崩壊後、1945年１月に対独協力者として終身禁固の判決を受けたシャルル・モーラスが「これはドレフュスの復讐だ」と叫んだという有名なエピソードは20世紀前半のフランス政治におけるドレフュス事件の影響の大きさをよく表している。モーラスの裁判については以下を参照のこと。福田和也『奇妙な廃墟 ― フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラトゥール』、国書刊行会、1989年、282-284頁。

13）ペギーの転向については以下を参照のこと。渡辺一民、前掲書、319-338頁。

14）Voir Michel Winock, *Nationalisme, antisémitisme et fascisme en France*, Éditions du Seuil, 1990, pp. 157-185［邦訳：ミシェル・ヴィノック『ナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』川上勉・中谷猛監訳、藤原書店、1995年、197-228頁］

＊本稿は科学研究費補助金（課題番号 16K13208）の助成を受けた研究成果の一部である。